

ナチスの家族にも愛と正義があった。
加害者の悲劇を描いて人間の愚かさを焙り出す。
映画の勇氣に、平和を願う。

★ 大林宣彦さん (映画作家)



戦争の被害・加害の裏に広がった苦境を乗り越える少女、妹弟を抱きかかえて
無惨を伝え残す高度な芸術作品です。

★ 海老名香葉子さん (エッセイスト)

少し厳し過ぎるかもしれないが、これが戦争の後遺症だ。
子どもたちの逃避行は残酷だが、見事な映像美で救われる。

★ 早乙女勝元さん (作家) 東京大学文学部 戦後文化資料センター 助教授

多感な少女の眼で、崩壊する歴史の局面を描いている。
これまでになかった視点がとても新鮮だ。

★ 池内紀さん (ドイツ文学者、エッセイスト)

敗戦直後の混乱をくりぬけ、ひたすら北を目指す子どもたち。
心の動きを雄弁に物語る映像がすばらしい。

★ 松永美穂さん (ドイツ文学者)

幼い弟妹を率えての魂を削るような逃避行。
代わりに私は何を得たか。

14歳の少女ローレに詰問された心地だ。

★ 志茂田景樹さん (作家) 上の子に読ませたい映画100選

何と悲しい歴史を私達は生きてきたのかし、
戦争の残した傷の惨さに、身悶えながら見ました。
心に残ったのは、何故か鮮やかな青。
若い女性監督の心の色なのでしょうか？
美しい映画です。

★ 加藤登紀子さん (歌手)

【圖不詳】

1945年春。敗戦後のドイツで、ナチ親衛隊の高官だった父と母が連合軍に拘束され置き去りにされた14歳の少女・ローレは、幼い妹・弟たちと遠く900キロ離れた祖母の家を目指す。終戦を境に何もかもが変わってしまった国内では、ナチの身内に対する目は冷たく、相手が子供であっても救いの手を差し伸べてくれる者はいなかった。そんな中、ナチがユダヤ人にしてきた残虐行為を初めて知り、戸惑うローレ。更に、ローレたちを助けてくれるユダヤ人青年・トーマスが旅に加わったことで、ローレがこれまで信じてきた価値観やアイデンティティが揺らぎ始める――



幼い妹弟と共に900キロ離れた祖母の家を目指す「ヒトラーの子供」ローレ
初めて知る残酷な真実とユダヤ人青年との出会いが彼女を大人にする